大日本耳鼻咽喉科會會報

第 五 十 卷 第 三 號

(昭和十九年三月)

原 著

〔西端教授開講十周年記念論文〕

我が教室ニ於ケル肉腫ノ統計的觀察

附 篩骨蜂巣ニ發生セル圓形細胞肉腫ノ一例

Dr. Takenosuke Watanabe: Statistische Beobachtung über
Sarkome in unserer Klinik.
Anhang: Ein Fall von
Rundzellensarkom im r. Siebbeine.

慶應義塾大學醫學部耳鼻科教室(主任 西端教授)

醫學士 渡 邊 武 之 助
ワタ ナベ タケ ノ スケ

緒 言

近時惡性腫瘍ニ關スル研究ハ時ト共ニ見ル可
キモノガアリ。之ガ統計的觀察モ屢々發表サレ
テ居ル。我が領域ニ於テモ小此木、廣神、宮
原、腰野、安積・河村、林・劉及比土井氏等ガ
惡性腫瘍全般ニ關シテ可ナリ詳細ナ臨牀的統計
ヲ報告シテ居ルシ。更ニ癌腫ニ關スル統計モ少
クナイガ、肉腫ノミニ關スル統計報告ハ其發生
率ノ比較的少イ爲メカ、本邦ニ於テハ其文獻ガ
比較的稀レデアル。

依ツテ余ハ我が教室ニ於ケル肉腫ニ就イテ聊
カ臨牀上ノ統計的觀察ヲ施行シテ見タノデ茲ニ
報告スル次第デアル。尤モ本統計ハ病理組織學
的ニ肉腫ト診斷サレ、其經過、豫後ヲ比較的詳
細ニ觀察シ得タ入院患者ノミニ限局シタ。即
チ昭和6年1月ヨリ昭和18年8月ニ到ル12年
8ヶ月間ニ入院加療シタ總數21名ヲ其材料ト
シタノデアル。尙ホ余ハ最近篩骨蜂巣ヨリ發生
シタ圓形細胞肉腫例ヲ經驗シタノデ 本統計ノ

末尾ニ附シ報告スル。

統 計

肉腫患者 21 例ハ同期間ノ入院患者 總數 7793 名ニ對シテ 0.26%ニ相當シ。同期間ノ癌腫入院患者 110 名ニ對スル比ハ 1:5.23 デアル。宮原ノ癌腫ノ約 $\frac{1}{4}$ ニ相當スルト云フ値ニ略ニ近似シテ居ル。

(1) 肉腫ノ種類及ビ發生部位

發生部位ハ耳。鼻腔及ビ副鼻腔。口腔。喉頭。食道ニ大別シテ見タ。尙ホ口腔肉腫ハ之ヲ廣義ニ解シテ舌。口蓋扁桃腺及ビ咽頭ニ發生シタモノヲ總括シ包含シタ。各種肉腫ノ部位別ヲ表示スレバ第一表ノ如クデアル。

第 一 表

種 類 \ 部 位	耳	鼻腔及ビ副鼻腔	口 腔	喉 頭	食 道	計
圓形細胞肉腫		1	2			3
紡錘細胞肉腫			1			1
所謂巨細胞肉腫	1		1			2
淋巴肉腫			3			3
肉網細胞肉腫			6			6
肉腫性内被細胞腫		1				1
癌腫性肉腫			1			1
型 種 不 明		1	2	1		4
計	1	3	16	1		21

即チ、細網細胞肉腫ハ 6 例デ。全肉腫總數ノ 28.5%ヲ占メテ最モ多ク。淋巴肉腫ハ 14.2%。圓形細胞肉腫ハ 14.2%デ之ニ次グ。細網細胞及ビ淋巴ノ兩肉腫ガ淋巴組織環ヲ有スル口腔ニ多イ事ハ組織學上肯定サレ得ル處デアル。尙ホ鼻腔及ビ副鼻腔ニハ殆ド總テノ種類ガ網羅サレ。就中紡錘細胞肉腫及ビ圓形細胞肉腫ガ最モ多ク骨肉腫ヤ黑色肉腫ハ稀有トサレテ居ルガ。余ノ調査ニ於イテハ表示スルヤウナ結果ニ終ツタ。

患部別ニ觀ルト口腔ハ 76.1%。鼻腔及ビ副鼻腔ハ 14.2%。喉頭ハ 4.7%。耳ハ 4.7%ノ順位デ。口腔肉腫ハ斷然多ク。食道肉腫ハ一例モ認メラレナカツタ。我が領域ニ於ケル口腔肉腫ニ對スル割合ハ土井ノ統計デハ 74.2%。安積・河村ニ依ルト 61.2%トナツテキテ 余ノ統計ニ近似ノ

値ヲ示シテ居ル。

更ニ發生部位ヲ細別スレバ第二表ノ如クナル。

第 二 表

耳 肉 腫	鼻 腔 及 ビ 副 鼻 腔 肉 腫	口 腔 肉 腫	喉 頭 肉 腫
外聽道 1	上顎洞 2	口 蓋 扁桃腺 7	披 裂 軟 骨 部 1
	篩 骨 竇 1	咽 頭 6	
		軟口蓋 2	
		硬口蓋 1	
1	3	16	1

即チ口蓋扁桃腺ハ 7 例ニ達シ全肉腫數ノ 33%デ。咽頭ガ 28%デ之ニ次グ。土井ノ統計デモ口蓋扁桃腺肉腫ハ約半数ノ多キヲ占メテ居ル。

發生部位＝關シ同期間中ノ癌入院患者ト比較 更ニ食道肉腫ヲ觀ザルニ食道癌ハ少クナイ（第三表参照）。
シテ觀ルニ、肉腫ガ口腔ヲ好發部位トスルノニ
反シ、癌ハ鼻腔及ビ副鼻腔並ニ喉頭ニ好發シ。

第 三 表

種 類	部 位	耳	鼻 腔 及 副 鼻 腔	口 腔	喉 頭	食 道	計
肉 腫		1 4.7%	3 14.2%	16 76.1%	1 4.7%	0 0%	21
癌		0 0%	47 42.7%	23 20.9%	28 25.4%	11 10%	110

(2) 年齢別及ビ性別

如クデアル。

年齢別及ビ性別ニ關スル統計ノ結果ハ次表ノ

第 四 表

年 齡	性 別	部 位		耳		鼻 腔 及 副 鼻 腔		口 腔		喉 頭		合 計			
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
														數	%
1—10		1		1				3		3				4	23.5
11—20								1		1				1	5.8
21—30					1		1	1	1					1	5.8
31—40								5		5				5	29.4
41—50					1		1	3	1	4		1	1	4	23.5
51—60					1		1	1	1	1				1	5.8
61以上								1		1				1	5.8
合 計		1		1	3		3	13	3	16	1	1	17	4	

即チ合計數ニ於テ罹患率ノ最モ高イ年齢ハ41—50歳デ、次ギハ31—40歳デアル。更ニ男子デハ31—40歳ガ最モ多ク、女子デハ41—50歳ガ多數トナツテ居ル。腰野ノ統計ニ依レバ11—20歳ガ最高ヲ示シテ居ルガ、安積・河村ノ統計デハ51—60歳ニ最モ多ク、土井ニ依レバ概ネ40歳代デ本統計ニ近似ノ値ヲ示シテ居ル。一般ニ肉腫ハ若年者ニ多イト看做サレテ居ルガ、本統計カラシテハ特ニ若年者ニ好發スルトハ斷言シ難ク、各年齢ニ亘ツテ發來シ、比較的高年者ニモ見ラレルヤウデアル。

更ニ之ヲ「グラフ」ニ示セバ第一圖ノ如クデアル。

第 一 圖

次ギニ我が領域ノ肉腫ノ最多數ヲ示ス年齢ガ果シテ全身臓器ノ肉腫ノ最多數ヲ示ス年齢ト一致スデアラウカト云フ點デアルガ、Küttner

及 Tietze ノ全身臓器肉腫ノ年齢別ニ依ル發生 頻度ヲ觀ルト次ノ如クデアル。

年 統 計 者	0—10	11—20	21—30	31—40	41—50	51—60	61以上
Küttner	57	105	116	134	140	112	64
Tietze	7	7	10	12	8	17	8

即チ罹患率ノ最大ナル年齢ハ Küttner = 依
レバ 41—50 歳デ本統計ト一致シ。Tietze ノハ
51—60 歳デ本統計ニ近似ノ値ヲ示シテ居ル。
又年齢ニ依ル罹患率ノ癌腫トノ比ハ如何ト云フ
ニ。我が教室ニ於ケル同期間中ノ癌發生年齢ト

比較シテ觀ルト第五表ノ如ク。癌ノ好發年齢
ハ 60 歳以上デ。肉腫ノ夫レニ比シ。少クトモ
20 歳ハ古ク 20 歳以下ニ一例ノ發生モ見ナイ
ノハ肉腫ト明瞭ナ對稱ヲナスモノデアル。

第 五 表

年 種 類	0—10	11—20	21—30	31—40	41—50	51—60	60以上
肉 腫	4	1	2	5	6	2	1
癌	0	0	1	7	29	31	42

性別ニ依ル肉腫發生ニ關シテハ。男子ハ女子
ニ比シテ遙カニ多ク 4.2 倍ニ達ス。此倍率ハ腰
野ノ 2.4 倍。安積・河村ノ 1.5 倍。土井ノ 1.7 倍
ヨリモ大デアル。我が臨牀ノ癌患者ノ男子ノ女
子ニ對スル倍率ハ 3.5 デアルガ。夫レヲモ凌駕
シテ居ル。

(3) 自覺症狀發現ヨリ受診迄ノ期間

比較的早期ニ受診セル者が多ク約半数ハ 6 ヶ
月以内ニ。大半ハ 1 年以内ニ來院受診シテ居
ル。其關係ハ第六表ノ如クデアル。

第 六 表

1 ヶ月 以 内	3 ヶ月 以 内	6 ヶ月 以 内	1 年 以 内	2 年 以 内	3 年 以 内	3 年 以 上
2	5	4	6	1	0	3

(4) 左 右 側

左右側罹患率ハ次ノ如クデアル(第七表)。

第 七 表

部 位	耳	鼻 腔 及ビ 副鼻腔	口腔	喉 頭	合 計
左 側	1	1	4		6
右 側		2	5	1	8
兩 側			7		7

即チ左側 6 例。右側 8 例。兩側 7 例デアツテ
患側ノ差異ハ認め難イ

(5) 職 業

職業別罹患率ハ第八表ニ示ス如クデアル。

即チ職業別罹患率ハ無職 7 例。會社員及ビ公
吏 4 例。農業 3 例ノ順デアルガ。本統計ノ上カ
ラデハ職業トノ關係ハ認め難イ

(6) 主 訴

耳肉腫 (1 例)……顔面神經麻痺。頰部腫脹。
鼻腔及ビ副鼻腔肉腫 (3 例)……鼻出血 (3

第 八 表

部 位 職 業	耳	鼻 腔 及ビ 副鼻腔	口 腔	喉 頭	計
農 業		1	2		3
會社員及ビ 公吏			4		4
教 員			1		1
學 生			1		1
硝 子 商		1			1
細 工 業			1		1
大 工			1		1
木 材 業			1		1
土 工		1			1
無 職	1		5	1	7
計	1	3	16	1	21

例)。鼻閉塞(2例)。鼻漏(2例)。頰部腫脹(2例)等が多く。其他眼痛(1例)。頭痛(1例)も認めラレタ。

口 腔 肉 腫 (16例)……鼻閉塞(6例)。頸部腫脹(5例)が斷然多く。咽頭痛(3例)。嚥下痛(3例)。嚥下障礙(3例)。嗄聲(3例)等ガ之ニ次ギ。其他鼻出血(2例)。咽頭異物感(2例)。呼吸困難(2例)。鼻漏(1例)。頸部側痛(1例)。難聴(1例)。頰部腫脹(1例)。發聲障礙(1例)。頭痛(1例)等ガアル。喉頭肉腫(1例)……嗄聲。嚥下障礙。

(7) 初診時ニ於ケル支配下

淋巴腺轉移ノ有無

第 九 表

部 位 有 無	耳	鼻 腔 及ビ 副鼻腔	口 腔	喉 頭	合 計
有	1	1	12	1	15
無		2	4		6
合 計	1	3	16	1	21

既ニ轉移ノ發生シテキタモノガ15例(71.4%)。轉移ヲ認メナカツタモノガ6例(28.6%)デ其比ハ2.5:1トナル。安積・河村ノ統計ニ依ルト。轉移ノ有無ノ比ハ25:1トナツテ居ル。即チ肉腫ハ癌腫ニ比較シテ比較的早期ニ轉移ガ形成サレ易イト云フ事ガ判ル。殊ニ肉腫ハ

原發腫瘍ノ摘出又ハ放射線療法ヲ施行シタ後ニ屢々轉移ヲ遠隔地ニ見ルト云フ事ハ吾々ノ經驗スル處デアル。

(8) 遺 傳 的 關 係

癌腫ニ於イテハ關係ノ存在ガ肯定サレテ居ルヤウデアルガ。肉腫ニ於イテハ確實デナク。余ノ統計ニ於イテモ關係ノ證明サレタモノハ1例モナカツタ。

(9) 治療法及ビ豫後

治療法トシテハ摘出術。「レントゲン」照射及ビ「ラヂウム」照射ノ三ツガアル。以上ノ療法ガ如何ナル組合セニ依リ。又何レノ方法ガ最も多く施行サレタカラ調査シテ見タ處第十表ノ如キ結果ヲ得タ。

即チ「レントゲン」照射ハ33.3%。「レントゲン」ト「ラヂウム」ノ併施ガ28.5%デ最も多ク。他ハ第十表ニ示ス如クデアル。

尙ホ「レントゲン」照射ニハ遠隔照射ト體腔管球ニ依ル方法ヲ採用シ。「ラヂウム」療法ニハ「ラヂウム」針或ハ1cmノ「シード」ヲ腫瘍内ニ挿入スル方法ヲ採用シタ。肉腫ニ對シテハ「レ」線照射ガ一般ニ效果的デアルト云フ事ハ周知ノ事實デアツテ山川ハ2年以上ノ絶對治療率ヲ15±4%ト記載シテ居ル。

豫後ニ關シテハ退院後ノ消息ガ不明ナモノモ少クナイガ。假リニ轉移ヲ入院中死亡セルモノ及ビ入院中輕快トナツテ退院シタモノトニ分ケテ見ルト第十一表ノ如キ成績トナル。

即チ治療法別ニ豫後ヲ見ルト。其輕快率ハ「ラヂウム」療法ガ66.6%。「ラヂウム」ト「レントゲン」療法ノ併施ノ場合ガ60.0%。「レントゲン」療法ノミガ57.1%トナツテキテ。更ニ剔出術ヲ實施シタモノハ一般ニ豫後ガ不良デア

第 十 表

治 療 法	部 位	鼻 腔 及 ビ 副 鼻 腔	口 腔	喉 頭	合 計	
					數	%
「ラヂウム」			3		3	14.2
「レントゲン」		1	5	1	7	33.3
「ラヂウム」及ビ 「レントゲン」		1	5		6	28.5
剔 出 及 ビ 「レントゲン」			3		3	14.2
剔出「レントゲン」 及ビ「ラヂウム」	1	1			2	9.5
計	1	3	16	1	21	

第 十 一 表

治 療 法	部 位	耳	鼻 腔 及 ビ 副 鼻 腔	口 腔	喉 頭	合 計		
						輕 快	死 亡	不 明
「ラヂウム」				2	1	2		1
「レントゲン」			1	3	1	4	1	2
「ラヂウム」及ビ 「レントゲン」				3	1	3	1	1
剔出及ビ「レントゲン」			1	1	2	1	3	
剔出「レントゲン」 及ビ「ラヂウム」	1	1				1	1	
合 計	1	1	1	9	4	11	6	4

ツタ。勿論肉腫ノ豫後ノ判定ハ腫瘍ノ増殖續延ノ程度ニモ關係スルモノデアルカラ、本統計上ニ表ハレタ治療法ノ結果ノミカシテ治療法ノ優劣ヲ批判スル事ハ出來ナイト云フ事ハ當然デアル。

更ニ患部別ノ豫後ノ判定ハ口腔肉腫以外ノ症例ガ僅少デアルカラ直チニ比較斷定ハ下シ難イガ、口腔肉腫（輕快率 56.2%）ハ鼻腔及ビ副鼻腔肉腫（輕快率 33.3%）ニ比較シテ豫後ハ良好

ノヤウデアル。之ハ口腔肉腫ガ其位置の關係カラシテ早期ニ發見サレ、從ツテ可及的徹底的ノ治療ガ可能デアル爲メト思惟セラレル。

尙ホ山川ハ放射線療法ノ成績カラシテ 淋巴肉腫、圓形細胞肉腫、細網細胞肉腫等ハ感受性ガ大デ、從ツテ其治癒率モ高ク、年齡的ニハ若年者ヨリモ 40—60 歳ノモノニ 效果のト述ベテ居ル。

症

例

患者。林某。男子。45歳。職業ハ土工。
初診。昭和 18 年 4 月 20 日。

主訴。右側鼻閉塞。鼻出血。
家族歴。兩系ノ祖父母及ビ父母ハ既ニ死亡シテ居

ルガ死因ノ遺傳的關係ハ不明。

既往歴。患者ハ生來健康ヲ著患ヲ識ラナイ。飲酒量ハ少量。喫煙スル。

現病歴。昭和17年3月頃カラ兩側ノ鼻閉塞及ビ右側ノ鼻出血ガ發來シ、鼻閉塞ハ漸次増強シテ、現今デハ全ク閉塞状態ニアル。

鼻出血モ最初ハ少量デアツタガ漸次頻發ヲ増シテ來タト云フ。併シ大出血ハ未ダ1回モ起ラナイ。

本年1月初旬カラ頭重感殊ニ右偏頭痛ヲ覺エ、2月以來輕度ノ右眼痛並ニ視力障礙ガ加ハツテ來タ。更ニ初診時1ヶ月前カラ血性膿性ノ鼻漏ガ流出シ、眼球壓迫感ガ起ツテ來タ。

全身所見。體格榮養中等度、顔貌ハ稍蒼白、右上下眼瞼ハ幾分浮腫狀ニ腫脹シテ居ルガ、眼球突出ハ認メナイ。胸部部ニ異常ナク、右頸部淋巴腺ハ2個小指頭大ニ腫脹シテ居ル。

血液所見。中性嗜好白血球56% (桿核型) 10%、分葉型46%。「エオジン」嗜好白血球2%。鹽基性嗜好白血球0%。淋巴球39%。移行型及ビ大單核細胞3%。白血球數7400。赤血球數 481×10^4 。血色素含有量(ザーラー)70。赤血球沈降速度(中等價)57。ワ氏反應 陰性。

以上ノ血液所見ニ依レバ白血球ノ核形推移ハ正常デアリ、貧血稍強ク、赤沈ハ速イト云フ結果ニナツテ居ル。尙ホ尿中ニ蛋白及ビ糖ヲ證明シナイ。

局所々見。鼻梁ノ右側カラ右頰部ニ亘ツテ幾分腫脹シ、輕度ノ腫痛ガアル。右鼻腔ヲ診ルニ中鼻道ニハ示指頭大ノ腫瘍ガ充滿シ、其一部ハ總鼻道ヲモ充塞シテ居ル。該腫瘍ノ表面ハ概シテ平滑、暗赤色ヲ呈シ、硬度韌軟、強イテ觸診スルト容易ニ出血スルガ疼痛ハナイ。此腫瘍ノ爲メ右下甲介ハ外下方ニ、中隔ハ内方ニ共ニ壓迫サレテ居ル。中甲介ハ見ル事ガ出來ナイ。左總鼻道ハ稍狹隘デアルガ、中甲介及ビ下甲介ハ正常デ、中鼻道粘膜ニハ少量ノ粘液ヲ見ル。後鼻鏡検査デハ右中鼻道ニ拇指頭大ノ腫瘍塊ヲ見ル。口腔ヲ診ルニ口蓋穹窿及ビ齒列ニ何等ノ異常ヲ認メナイ。發聲障礙モナイ。聽器ニモ變化ナク、聽力障礙モナイ。咽喉部ニモ著變ガナイ。

X線所見。後頭前頭攝影法ニ依レバ、右篩骨ヨリ鼻腔ニ及ンデ相當廣範圍ニ強イ陰影ガアル。此陰影ハ右篩骨蜂窠トノ境界ヲ認メ難ク、上方デハ正中線ヲ越エテ左側ニ及ビ、右鼻腔ト右上顎洞トノ間ノ骨

ノ陰影ハ其上方ガ腫瘍ニ依ル陰影ノ爲メ消失シ、腫瘍ハ右上顎洞内ニ迄侵潤増殖シテ居ルヤウナ陰影ヲ示シテ居ル。右眼窩ノ骨壁ハ正常。

左右徑攝影法ニ依レバ篩骨蜂窠カラ下方鼻腔ニカケテ腫瘍塊ノ呈スル陰影ガアル。此陰影ハ楔狀洞ニモ及ンデ居ルガ、前頭洞ニハ變化ガナイ。頭蓋底ノ位置ハ正常デアルガ、後部篩骨蜂窠及ビ楔狀洞ノ天蓋ニハ骨破壊ト看做サレルヤウナ變化ヲ見ル。

手術並ニ經過。4月20日入院。右中鼻道ニ在ル腫瘍ノ表層ヨリ試験切片ヲ採リ病理組織學的檢索ヲ施行シタ所内腫ナル事ガ確定シタ。5月12日先ヅ外頸動脈ノ結紮ヲ施行シ、次イデムーア氏皮膚切開ヲ加ヘテ腫瘍ノ剔出術ヲ行フ。皮膚切開ニハ電氣「メス」ヲ使用シタ。

手術所見トシテ上顎洞犬齒窩ニハ骨破壊ハ認メラナレガ、可成リ菲薄ニナツテキタ。

上顎洞粘膜ハ「ポリープ」狀ニ強ク肥厚シ粘液膿性ノ分泌物ノ滯留ヲ見ル。眼窩底ニハ異常ガナイ。中鼻道額門附近ノ粘膜ノ炎症性變化ハ相當高度デアアルガ、未ダ腫瘍組織ノ擴延ハ肉眼的ニハ認メラレナイ。鼻腔側壁ニモ炎症性變化が強ク、然カモ腫瘍組織ニ依ル壓ノ爲メニ相當高度ノ萎縮ノ所見ガ認メラレルガ、腫瘍ニ依ル病變ハ見ラレナカツタ。鼻腔粘膜ヲ甲介モ強ク萎縮シテ居ルガ、肉眼的ニハ腫瘍ノ増殖擴延ノ所見ハ認メラレナイ。

鼻腔内ハ暗赤色デ韌軟、表面比較的圓滑ノ腫瘍デ充滿サレテ居ル。先ヅ固有鼻腔内ノ該腫瘍組織ヲ除去シ、篩骨蜂窠ノ狀態ヲ觀察セントシタガ、既ニ蜂窠隔壁ハ破壊融解サレ、鼻腔内ニ於ケルト同様ナ腫瘍組織デ充滿サレテ居ルノガ認メラレタ。然カモ篩骨ノ天蓋、紙狀板及ビ後壁ニハ骨融解ガ證明サレタ。更ニ楔狀洞トモ完全ニ交通シ、楔狀洞内モ腫瘍ノ増殖ガ認メラレタ。楔狀洞ノ後壁及ビ洞底ニハ骨缺損ガ認メラレナイ。

腫瘍ハ硬腦膜ト後部篩骨蜂窠ノ後壁ノ骨融解ニ依ル骨壁缺損部ニ於テ癒着シテキタ。可及的廣範圍ニ亘ツテ腫瘍組織ヲ剔出除去シタ。5月21日、殘存シテ居ル腫瘍組織ノ除去ヲ再度行フ。5月27日頃ニハ術創モ可成リ清淨トナツテ來タガ、稍々衰弱ノ度ヲ増シ、之ニ加フルニ眼球突出ヲ起シ、鬱血乳頭モ證明サレルニ到ツタ。

5月29日カラ「レントゲン」深部治療ヲ開始シ

タ。以來術創ハ漸次清淨トナリ。自覺の症狀モ輕快シテ來タ所6月8日突如腦溢血ヲ併發シ意識全ク消失ス。左半身麻痺ヲ現ハシ同夜半途ニ鬼籍ニ入ツタ。照射シタ「レントゲン」量ハ5月29日カラ6月7日迄ニ照射量6回デ1800rデアアル。

腫瘍ノ肉眼の所見。摘出シタ腫瘍ハ前後徑5cm。上下徑2.5cm。左右徑1.0cmノ大キサデ。下面ハ概ネ圓滑デアアルガ、左右側ハ稍々凹凸不平等デアリ。所々壞疽性デ暗赤色ヲ呈シテ居ル。硬度ハ靱軟。

組織學的所見(第二圖)。腫瘍組織ハ肉腫様デ血管ニ富ム。腫瘍細胞ハ圓形。橢圓形。時ニ紡錘形デ。大キサハ不同デアアル。尙ホ癌腫變性ヲ所々ニ認メル。格子狀纖維ハ各腫瘍ヲ纏繞シテ存在シテ居ル。所ニ依ツテハ膿性浸潤ヲ起シ分核型白血球ノ集結ヲ見ル。

第 二 圖

考 按

一般ニ副鼻腔ニ肉腫ノ發生スル事ハ決シテ稀有トスル處デハナイガ。篩骨蜂窠ニ原發スル事ハ比較的尠ナイ。Küttnerニ依レバ。上頸洞肉腫58例ニ對シテ篩骨蜂窠肉腫ハ6例デアリ。土井ノ統計デハ前者ノ12例ニ對シテ後者ハ1例ニ過ギナイ。余ノ寡聞ニ從ヘバ本邦ニ於ケル篩骨蜂窠肉腫症例ハ遠藤・永井ノ骨肉腫。井野ノ細網肉腫。鈴木ノ骨肉腫。土井ノ肉腫(型種不明)ノ4例ヲ見ルノミデアアル。

其發生原因ニ關シテハ一般ノ肉腫ト同様ニ組織畸形又ハ迷芽等ノ先天性素因ニ依ルモノ。外傷ニ基因スルモノ。又ハ慢性炎症竈ニ發生スルモノ等ガ舉ゲラレルガ。本症例ニ於イテハ何等ノ認ムベキ原因ヲ見出シ難イ點カラシテ。或ハ第一ノ原因ニ依ルベキモノデアラウカ。

臨牀上ニ於イテ特ニ注目スベキ事柄ハ。篩骨蜂窠或ハ楔狀洞ニ發生シタ場合ニハ。其症狀ノ發現スル時期ニ既ニ腦ニ轉移ガ形成サレル機會

ガ多ク。從ツテ豫後ハ全ク不良デアルト云フ事デアアル。

一般ニ篩骨蜂窠肉腫ノ症狀トシテハ。鼻閉塞。嗅覺障礙。呼吸障礙。壅塞鼻韻。惡臭アル膿性又ハ血性鼻漏。鼻出血。眼球突出。眼筋麻痺。頭痛等ガ舉ゲラレ。更ニ楔狀洞ニ浸潤スレバ後頭痛。鼻咽腔ノ閉塞。歐氏管閉塞。難聽。視神經障礙等ガ加ハルシ。頭蓋内合併症ヲ起セバ頭痛ハ愈々強ク。惡液質及ビ貧血ガ高度トナツテ來ル。

尙ホ組織學的ニハ紡錘形細胞。圓形細胞。巨大細胞。骨粘液或ハ黑色等ノ諸肉腫ガ記載サレテ居ルガ。紡錘形細胞ト圓形細胞肉腫トハ稀レナ内ニモ比較的多ク見ラレル。惡性度ニ關シテハ本症例ノ如キ圓形細胞肉腫ハ黑色肉腫ニ次イデ惡性デ。比較的早期ニ腦ヘノ轉移ヲ惹起スルモノト言ハレテ居ル。年齡ノ關係デハ土井ハ鼻腔及ビ副鼻腔ノ肉腫ノ統計的觀察ノ結果カラ

シテ其好發年齡ハ40歳代ト述ベテ居ルガ、本症例モ45歳ノ患者デアツタ點カラシテ好發スベキ年齡ニ該當シテ居ルモノト言ヘル。

治療法トシテハ肉腫ノ統計的觀察ノ處ニ於イテ既ニ述ヘタ如ク、腫瘍剔出術ノ外ニ「レ」線及ビ「ラヂウム」照射ガ施行サレ得ル。

本症例ノ如ク既ニ眼球突出症ヲ惹起シテ居ル場合ニハ治療ノ時期特ニ手術ノ時期ハ既ニ失ハレテ居ルト看做サレナケレバナラナイ。

照射療法トシテハ「レ」線照射ガ效果的デ近時大イニ用ヒラレ、山川ハ一般ノ肉腫ニ對シ「レ」線照射ノミヲ以ツテ15±4%ノ治癒率ヲ擧ゲテ居ル。殊ニ本症例ノ如キ圓形細胞肉腫ハ其感受性が大デ從ツテ效果的デアル事ハ一般ニ認メラレテ居ル處デアル。即チ本症例モ可及的徹底的ニ手術ニ依ツテ腫瘍組織ヲ剔出シテ後「レントゲン」照射ヲ施行シ、爲メニ術創モ日ヲ經ルト共ニ漸次清淨トナリツ、アツタガ、最初ノ手術時ノ所見トシテ眼窩壁並ニ筋骨天蓋ノ

骨ガ既ニ破壊サレ、可成リ高度ノ眼球突出症ヲ惹起スルト同時ニ、篩骨天蓋ニ於イテ硬腦膜ト腫瘍組織ガ密ニ癒着シテ居ルノガ判明シ、殊ニ術後モ頭痛ガ依然トシテ存続シ、然カモ其頭痛ハ漸次ニ増惡シテ來タ點カラシテ、腦組織ヘノ増殖モ想像サレタノデアツテ可及的徹底的ノ手術操作モ既ニ其適應症ノ時期ヲ失ヒ、「レントゲン」照射モ奏效スルベク餘リニモ廣範圍ニ亘ツテ増殖浸潤シテキタモノト解釋サレルノデアル。

殊ニ「レ」線ニ依ル加療中卒然腦溢血ヲ併發シタ事ハ肉腫ノ増殖ガ腦血管ノ壁ニ及ビ、爲メニ血管壁ノ破壊融解ヲ促進シ、出血ノ惹起ヲ容易ナラシメタトモ想像サレル(勿論剖檢ヲ施行シナカツタノデ斷定的ノ事ハ言ヒ得ナイガ)。

然カモ此腦溢血ノ併發ガ死期ヲ促進サセタ事ハ事實デアルガ、結局既ニ治療ノ時期ヲ失ナツテキタモノト見テ差支ヘナイデアラウ。

結

(1) 昭和6年1月ヨリ昭和18年8月ニ到ル滿12年8ヶ月間ニ入院シタ患者總數7793名中ニ於ケル我が領域ノ肉腫患者21名ニ就テノ統計的觀察デアル。

(2) 肉腫ハ口腔(舌、口蓋扁桃腺、咽頭ヲ含ム)ニ斷然多ク16例(76.1%)デ、次ギガ副鼻腔ノ3例デアル。

(3) 肉腫ノ種類トシテハ細網細胞肉腫ノ6例(28.5%)ガ最も多ク、淋巴肉腫ガ之ニ次グ。

(4) 年齡的ニハ41—50歳ガ最も多ク(28.5%), 31—40歳ガ之ニ次グ。更ニ男子ハ女子ヨ

論

リ遙カニ多ク4:1ノ比デアル。

(5) 罹患側トシテハ左右別ニ相違ハ認メ難イ。

(6) 職業ハ會社員及ビ公吏、農業ガ多イ

(7) 主訴トシテハ副鼻腔肉腫ニ於イテハ鼻出血、鼻閉塞、鼻漏、頬部腫脹等ガ多ク見ラレ、口腔肉腫デハ鼻閉塞、頬部腫脹ガ多ク、咽頭痛、嚥下痛、嚥下障礙、嗄聲等モ認メラレタ。

(8) 初診時ニ支配下淋巴腺ニ轉移ノ認メラレタモノハ15例(71.4%)デアル。

(9) 治療法ハ「レントゲン」照射ヲ實施シ

タモノガ最モ多ク7例(33.3%)デ「ラヂウム」及ビ「レントゲン」ヲ併施シタモノガ6例デアル。

(10) 豫後ハ口腔肉腫ガ最モ可良デアル。

(10) 余ノ経験シタ症例ハ45歳ノ男子デ右

篩骨蜂巢ニ原發シタ圓形細胞肉腫デアル。可及的腫瘍組織別出後「レントゲン」照射ヲ實施中。突然腦溢血ヲ併發シテ不幸ナ轉歸ヲトルニ到ツタモノデアル。

拙筆ニ臨ンデ恩師西端教授ノ御校閲ヲ深謝ス。

主 要 文 献

1) 腰野二雄: 耳鼻臨牀。第31卷, 第5號。 2) 安積・河村: 大日耳鼻。第15卷, 第9號。 3) 林・劉: 大日耳鼻。第47卷, 第5號。 4) 土井傳: 大日耳鼻。第49卷, 第6號。 5) 鈴木貞一: 耳喉。第4卷, 第7號。 6) 井野奎郎: 耳喉。第13卷, 第9號。 7) 遠藤・永井: 耳喉。第15卷, 第8號。 8) 羽鳥

鎮雄: 耳喉。第15卷, 第9號。 9) 小此木修三: 大日耳鼻。第25卷, 第4號。 10) 宮原林: 大日耳鼻。第42卷, 第6號。 11) 廣神伊藤: 大日耳鼻。第38卷, 第2・3號。 12) S. Hormann: Die Sarkome. 13) Denker u. Kahler: Handbuch der H₂, N₂; Ohrenheilkunde Bd. V.

(原稿到着= 昭和18・11・20)